

『新しい学校』一九五三年九月（興文館）

■教育時評

二十世紀の

不思議

—社会科の解体—



八月に正式答申されることになったという教育課程審議会の社会科に対する答申案が新聞に発表され、その内容をめぐって与論がやかましくなっている。案の内容は地歴の教育の取扱に重点が置かれているが、よく検討してみると、やはり戦後努力して来た進歩的な教育の方向とは別箇なものがひそんでいるようである。

まず小学校で「下学年の社会科は地理や歴史などに分化しないで組織した方がよいと考える」といつているが、それは当り前すぎで、言う方がおかしい。出来もしない事だし、そんなことが審議会で論議されたとしたら首をひねりたくなるようなことである。「上学年では毎週全く別科目として教えられる

計画は望ましくないが」といつているから解体でないかの如く受けとられるが、「もう少し系統だった地誌的および年代史的な知識や理解が身につくような指導計画を考える必要がある」というのが、眉つばものである。

まず地誌的、年代史的な知識理解の指導計画というものは、一体どのように実施されるであろうか。恐らく今の日本の教師がやれば、地理的単元、年代史的単元が考えられるであろう。とすれば社会科の単元は地理的単元、歴史の単元、それから社会科的単元の三種類に分解することになるではないか。実質上の解体である。

中学校になるとこの解体の傾向はもつとはつきりしている。「社会科歴史、社会科地理と呼んでもよい」といつているから、社会科は地理と歴史とからなるということである。尤も中学校の社会科は現在が既に地理と歴史の単元によせあつめであるから、事実を誰はばかる所なく言うようになったということである。

高等学校に至っては、一般社会科ははつきり解体すると言っている。こうしてみると、社会科が現在どういう取扱いをうけているかがよくわかる。上級になるにしたがってはつきり遠ざけられていて、わずかに小学校で

句をかぐ程度である。

さてこれで具体的に教科書が改編されて、それに従った学習の姿がどうなるかを考えてみると、もはや社会科は孤城落日であろう。地理や歴史について、体系的な知見をもつことの必要性は誰も反対するものはない。がそれが教育的に与えられるにはどういう方法が必要であるかということになると、現在の日本人の頭には、ワンマン首相をはじめとして昔ながらの地理、歴史教科書による教育が頭に浮ぶらしい。誠に頭脳の弱さ、如何ともしなすがたいものがある。

第一章関東地方は一府六県であつて、県庁の所在地云々というあの昔の教科書は全くチンプンカンプン、馬鹿々々しい思い出となつてわれわれに残っている。大人にとつて体系的に書いたつもりだろうが、子供にはそういう体系の前提（例えば日本の政治の実態）がわからないから妙な観念にとりつかれて、地球の上に区切りがあるように考えるのである。今の日本の政治はどのように行われているかということの問題にして地方行政区画も考えて行くということではなくては、本当に知識は体系的とはならないのである。社会の姿を問題にすることが中心となつてそこに、地理や歴史もはつきり位置づくの

である。だから地理や歴史が必要なのではない。リアルな社会の姿をみる必要があるのである。このことが遺憾ながら素人にはわからないからワンマン首相のお声がかりとなって出て来るのである。そうしてこの二十世紀の半ば過ぎの教育内容の中から、社会を見るという教科が姿を消してしまうのである。驚くべき時代錯誤である。

併しこれもまた現代日本人のもつ運命なのかも知れない。社会の現実を見ないで観念論をふりまわすのは一種の流行である。進歩主義者などといわれる人が、社会科はアメリカから与えられたものだななどという理論を大真面目になって、振廻して排撃しているのである。そして日教組的民族独立の歴史や地理を与えようとする。ワンマンは愛国的歴史や地理を主張する。教育的に見れば何れも観念論でしかない。符節を合しているのも妙なことである。社会の現実をみることを忘れて、何所に民族独立や愛国であろうか。

社会科が今のままでよいとは誰も考えてはおるまいが、これをリアルな社会学習にしてゆく努力こそ、今払われるべきであつて、それは、地理歴史にうつつをぬかすことではあるまい。素人論をよく位置づけて正しく導いて行くべき教育課程審議会がこのような

答申をすることは情ないことではないか。左右の圧力に屈したのか、買収されたのか、日本の教育の良識は失われつつあるのであろう。

(矢口新)